

2003（平成 15）年 10 月 4 日

讃良郡条里遺跡（その 4）現地公開資料

財団法人 大阪府文化財センター

・讃良郡条里遺跡ってすごい！

1996 年度より、財団法人 大阪府文化財センターは国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けて、第二京阪道路（北大阪道路）建設に伴う発掘調査を実施しています。この讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡に関しては、昨年度から調査が本格化し、奈良時代末頃の河跡から、人の顔を描いた土器や絵馬、人形（ひとがた）といった、「まじない」にかかわる興味深い資料が得られています。また、平安時代の建物や井戸の跡、縄文時代の石器づくりの跡などもあり、これまで知られているような、古代以来の耕地の地割（条里）跡を残す遺跡というだけでなく、各時代の貴重な遺構・遺物が埋もれていることがわかってきました。

・2～3 世紀の集落跡を確認

今年度の上半期、当遺跡（その 4）現場では、3つの調査区で約 5,000 m²の調査を行ってきました。そのうちの2つの調査区（1・4区）において、弥生時代後期末から古墳時代初頭（西暦 2～3 世紀ころ）の建物や井戸、溝などが見つかり、ここに、今から 1,800 年前の集落が存在したことが明らかになりました。

昨年の調査で、この遺跡に東接する小路（しょうじ）遺跡において、同じ時期の墓の跡がまとまって見つかっていましたが、今回は、そこに墓地を築いた人々の日常生活の場を発掘することができたこととなります。

可能性のあるものも含めると、建物が 7 棟、井戸が 4 基あります。さらに、建物に伴うと考えられる排水溝が数条確認されていますので、調査区外にはもっと多くの建物が存在し、大きな集落をつくっていたものと推測されます。これらは 1 区で発見された谷状の窪地の南側にのみあり、私たちは今回、集落の北端を調査しているのだらうと考えられます。

・建物跡にみられる特徴

建物には地面を四角く掘り窪めてつくられたものが見られます。そのため、それを竪穴（たてあな）建物といいます。今回見つかった建物のうち 2 棟（建物 2・5）には、長方形の窪みの外周を C 字状に取り囲む溝が伴っていました。この溝には、屋内を湿気から防いだり、建物を立派に見せるような目的があったと思われます。溝内には土器がたくさん捨てられていました。羽曳野市尺度（しゃくど）遺跡にもよく似た例があります。

竪穴建物はもう 1 棟（建物 1）がありますが、こちらには建物内部を縁取るように低い段（「ベッド状遺構」）が設けられていました。先の 2 棟と比べると若干小振りで、正方形に近いかたちに掘り窪められています。南辺寄りの場所から、種類は不明ながら、鉄器・

青銅器片が出土しました。金属器は当時にとっては貴重品です。

この「ベッド状遺構」も先の C 字状の溝も南側で途切れ、あるいは開いています。これはおそらく建物の入口の方向を示すものでしょう。

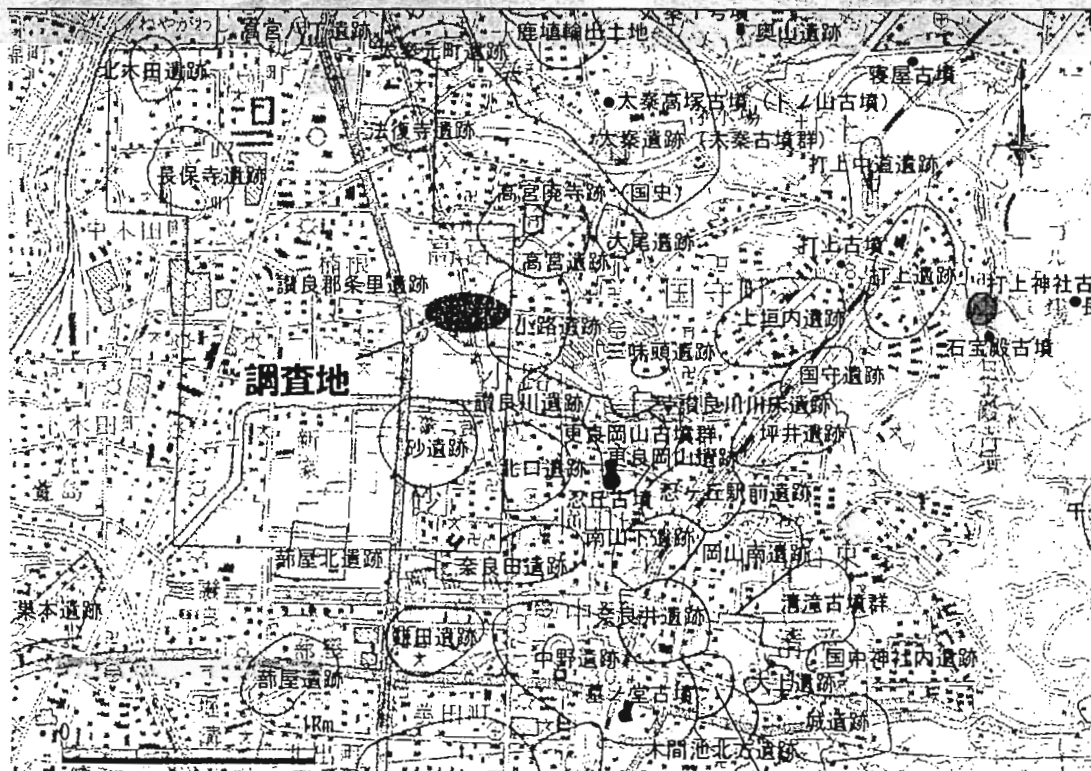
一方、建物 3・4 は掘立柱建物と呼ばれるもので、地面に穴を掘って柱を立て、その柱の並びを壁とします。いずれも竪穴建物に比べ規模は小さいようです。

・建物周辺につくられていたもの

C 字状の溝には排水のための溝がついています。また 4 区には大きな溝があり、排水溝の水を集めていたようです。井戸には大小ありますが、いずれも素掘りで井戸枠は設けていませんでした。大きな井戸からは土器のほか、加工された木片なども出土しています。長方形の穴に完形の壺を納めているものも 1 基ありました。これも墓だったのでしょうか。

・まとめ

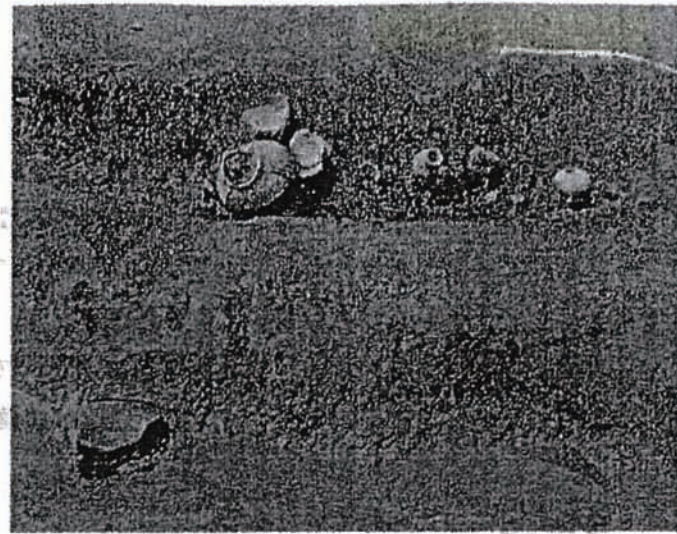
今回、2～3 世紀の建物とその周辺に見られる井戸や溝などのようすが明らかになりました。1 区と 4 区から発見された状況を見ますと、C 字状の溝をもつ竪穴建物を核として井戸や小型の建物などを伴うグループが集落内に複数あったと考えられます。こうした集落と小路遺跡に見つかった墓地のつくられ方の比較検討を通して、1,800 年前の遺跡のようすを復元して行きたいと思います。



調査地の位置と周辺の遺跡（国土地理院 1：50,000 地形図『大阪東北部』を改変使用）



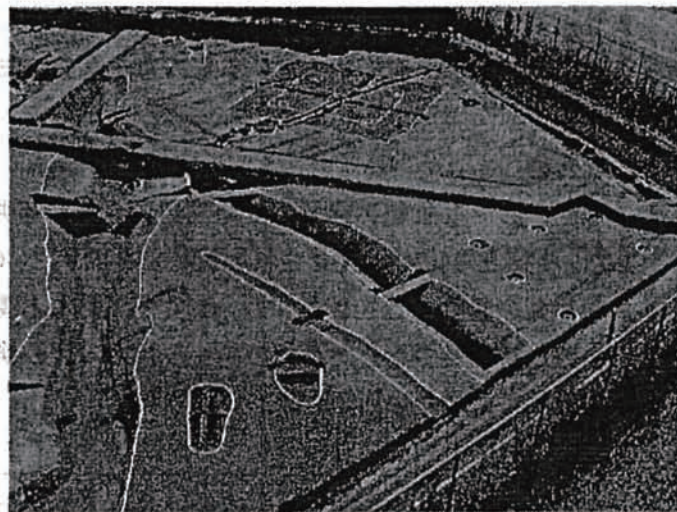
1 区の遺構（東から）



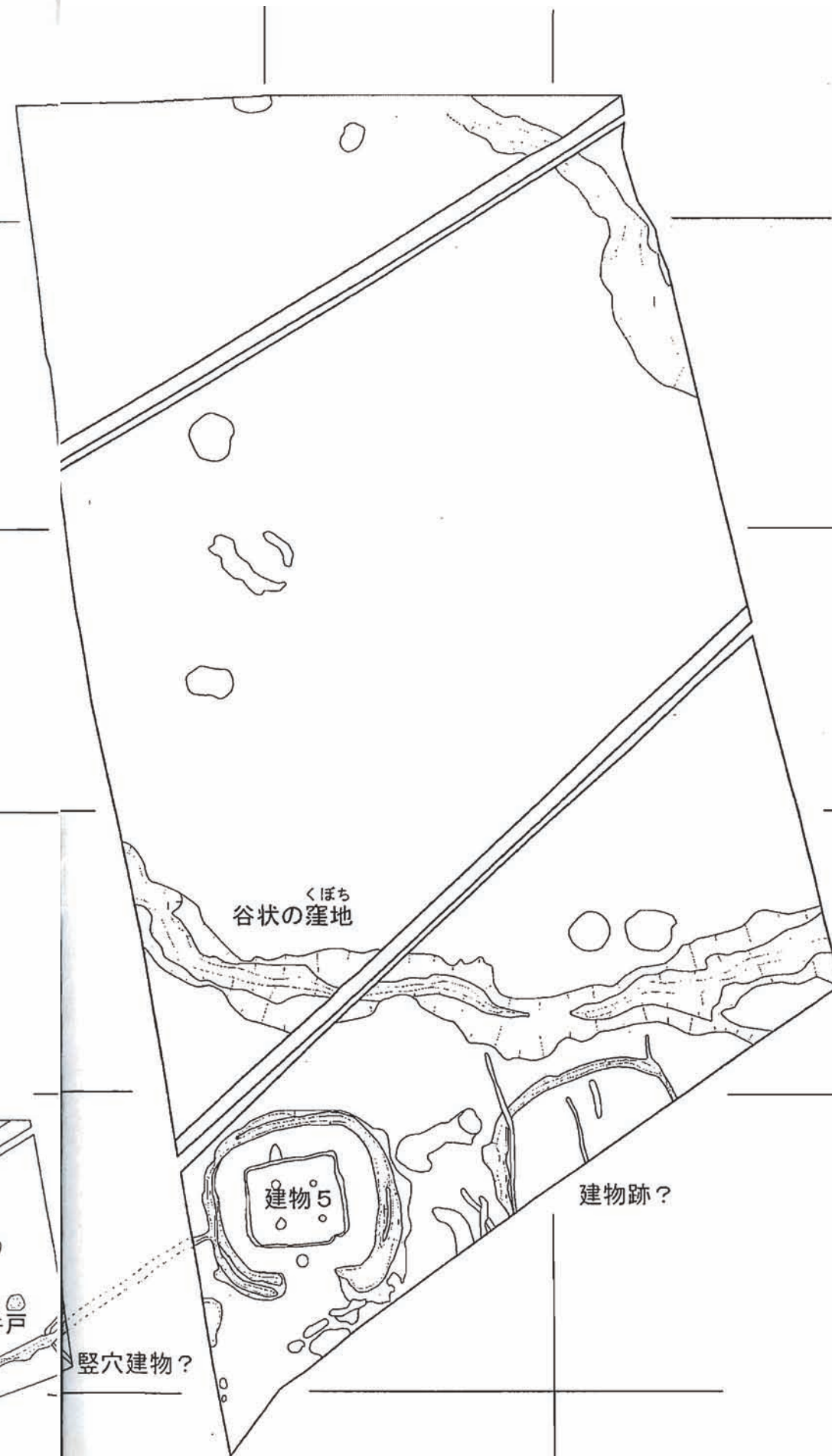
1 区 建物5に伴う溝の土器



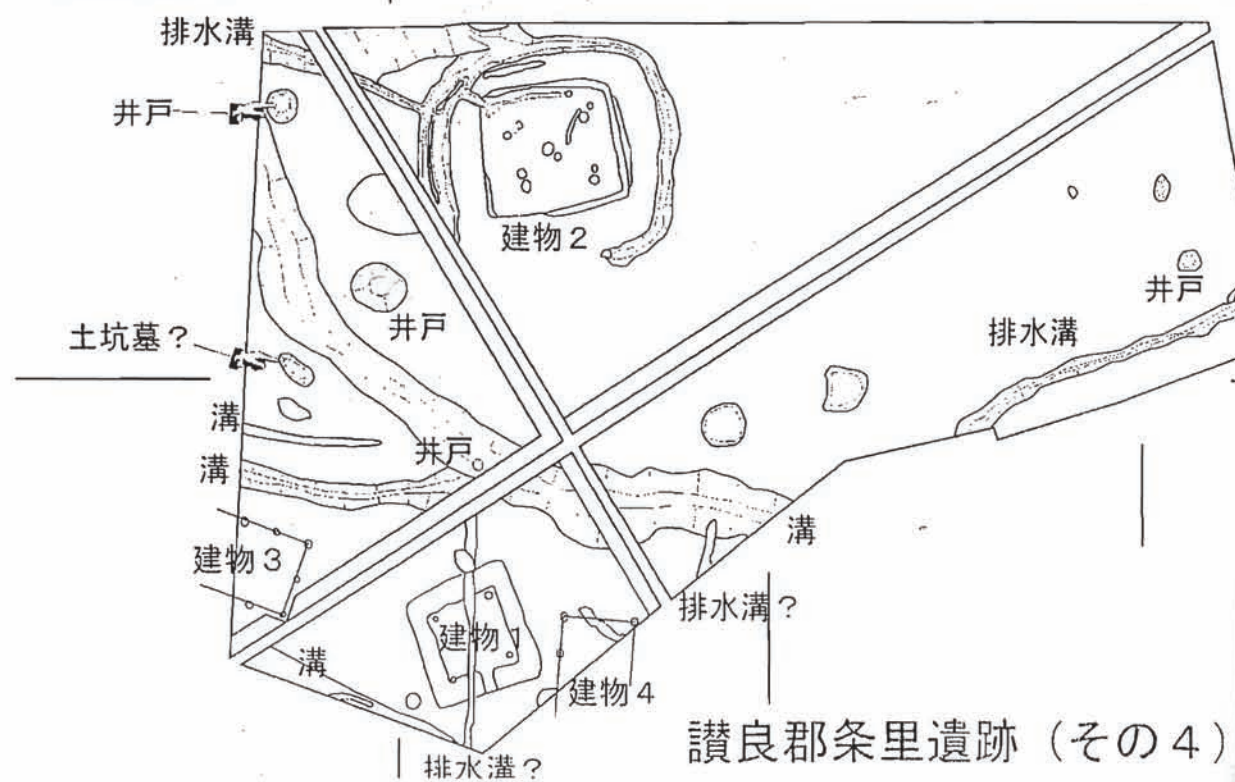
4 区 建物2周辺（西から）



4 区 建物1周辺（北西から）



1 区



4 区

讃良郡条里遺跡（その4）

1・4 区遺構配置図

